

鬼 隈 横 穴 群

福岡県八女郡立花町山崎所在横穴群の調査

立花町文化財調査報告書

第 3 集

1 9 8 7

立花町教育委員会

鬼 隈 横 穴 群

福岡県八女郡立花町山崎所在横穴群の調査

1987

立花町教育委員会

序

昭和58年度の大塚古墳、昭和59年度の曲松遺跡の発掘調査に続いて、山崎中通地区「鬼隈横穴群」の発掘調査を実施し、ここにその報告書を作成することができました。これは、関係者各位のご理解とご協力のおかげであり心から謝意を表するものであります。

遠い祖先が本町に残しました遺跡は、本町の歴史的、文化的、そして精神的な遺産であり、科学的調査を実施し事実を明らかにすることはその遺産を大切に受け継ぐことでもあるかと思えます。さて、そのことは同時に祖先を大切にし、祖先の長い営みであります歴史を大切にすることであり人間尊重に係ることでもあると考えられます。経済的高度成長期を通して、余りにも物の豊かさや経済的価値の追求に片寄りすぎて、大切な心の正しき豊かさがややないがしろにされてきたきらいがあります。それが社会にひずみを起し、わが国社会の将来を背負う青少年の心を荒廃させる原因ともなっているようでございます。祖先と祖先が残しました歴史的、文化的遺産を大切にすることは学術的な価値とともに教育的見地からも価値あることだと考えられます。歴史と自然の豊かな本町の精神的、文化的環境をさらに豊かなものとするのに少しでも役立つものであれば望外の幸であります。

今回もまた、県教育庁南筑後教育事務所の川述昭人先生はじめ、地権者の方々、発掘作業を手伝っていただきました方々など多くの方々のご指導、ご協力をいただくことができました。重ねて心から厚くお礼申し上げますとともに、一人でも多くの町民の方々が本町の歴史に関心をもっていただき、文化財の愛護にご協力賜ることを念願致す次第でございます。

昭和 62年 3月31日

立花町教育委員会

教育長 竹島 行夫

例 言

1. この報告書は、昭和61年度の国庫補助を受けて、立花町教育委員会が発掘調査を実施した鬼隈横穴群の調査記録であり、この際、福岡県教育委員会の援助を得た。
2. 調査関係者は次の通りである。

調査責任者	立花町教育委員会	教育長	竹島 行夫		
社会教育課	課 長	江崎 和夫	中央公民館長	内野 久光	
同	係 長	西村 政輝	社会教育指導員	清川 昇	
同	史 員	高山 隆夫	同	黒木 暁子	
同	同	井上 武明			
同	同	川島 幹夫 (文化財担当)			
同	同	深町 明夫			
同	同	久保 鈴子			
調査担当者	福岡県教育庁南筑後教育事務所	社会教育課	技術主査	川述 昭人	
調査補助員	-			田中 康信	

3. 遺物整理は、福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導のもと九州歴史資料館復元室で行った。写真撮影は遺構を川述昭人が撮り、遺物は九州歴史資料館の石丸洋氏にお願いした。遺構の実測は川述と田中康信が行った。遺物の実測は川述と平田春美氏が担当した。挿図の製図は豊福弥生氏が行った。
4. 本書の執筆と編集は川述昭人が行った。

本 文 目 次

I はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 位置と環境	1
II 横穴群の調査	3
1. 遺 構	3
2. 遺 物	16
III おわりに	33

I はじめに

1. 調査の経過

町内には多数の横穴群が所在しているが、横穴が立地している丘陵中腹から裾部にかけてはミカン、キウイ等の柑橘類の植えつけと繁茂により、大多数の横穴は現地に足を踏み入れる事が困難な状況になりつつある。さらに、裾部に所在する横穴の入口は、開墾による、土砂や伐木で埋まってしまい、横穴内に立入ることや、その所在を確かめる事すらできにくい状態である。このため、町内に多数所在するとは言うものの、調査もしないで消え去ろうとしているこの貴重な文化遺産を、何とか今のうちに調査をして、保存と活用にも努めなければならないという観点から調査に踏み切ったのである。今回調査を実施した鬼隈横穴群は日枝神社の裏にあり、文化財の活用という観点から見て調査後は見学者が最も訪れやすい場所を選定した。この調査にあたっては、土地所有者田中美千治氏の快い承諾と御協力を頂き実施する事ができた。ここに記して感謝の意を表します。発掘調査は、昭和61年11月4日から12月2日まで行い、調査後の一部埋めもどしと周辺整備のため、12月中旬に2、3日を要した。

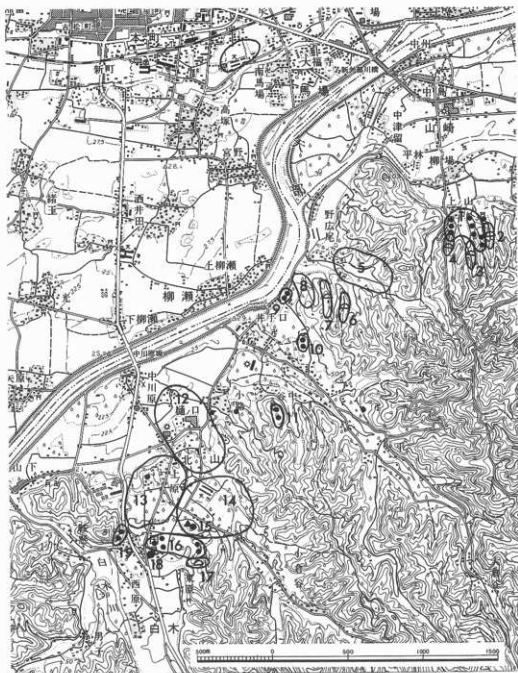
調査に際しては、立花町教育委員会をあげて積極的に取り組んで頂き、調査の成果は現地見学の実施や町報紙掲載等の配慮を得た。調査中には、福岡県文化財保護指導委員の木附光雄氏、立花町文化財専門委員杉森彬氏等の指導・助言を頂いた。横穴内の工具痕等の撮影には南筑後教育事務所社会教育課長高口栄喜氏の協力を受けた。実測には県教育庁文化課沢田俊夫氏、南筑後教育事務所日高公德氏の援助を頂いた。この他、現地作業に従事された町内の方々の協力により調査を終了する事ができた。記して謝意を表します。

2. 位置と環境

遺跡は、福岡県八女郡立花町山崎字鬼隈に所在する。

立花町は福岡県の西南部に位置し、北は釈迦ヶ岳山に源を発した矢部川が流れ、対岸の八女市と接している。南は熊本県三加和町と山境で接しており、山間部の占める割合が大である。

矢部川左岸の丘陵には弥生時代から古墳時にかけての遺跡が最も多く見られる。当該遺跡の西方1.3kmの丘陵先端部からは弥生時代後期後半から終末期にかけての甕棺墓26基が検出された曲松遺跡がある。古墳時代では杉森彬氏によると茶臼塚前方後円墳1基、大型古墳の大塚1号墳を始めとする円墳33基が確認されており、内部主体は箱式石棺、横穴式石室を一部見る事ができる。横穴群は代表的なものとしては山下横穴、稲荷山横穴、鬼隈横穴、中通横穴、上の山横穴、浦田横穴等があり、大半が矢部川に面した丘陵に構築されている。岩質は硬質砂岩、凝灰岩などであり、稲荷山横穴群中には、玄室は大型で、奥壁に平行に棺床を削り出し、左右に2対ずつの石枕を備えた立派なものもある。



- | | | | |
|---------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 上の山古墳群 | 2. 鬼隈横穴群 | 3. 中通横穴群 | 4. 上の山横穴群 |
| 5. 野広尾遺跡 | 6. 野広尾横穴群 | 7. 稲荷山横穴群 | 8. 曲松遺跡 |
| 9. 曲松1・2号墳 | 10. 谷中1・2号墳 | 11. 六所宮1・2号墳 | 12. 北山遺跡II |
| 13. 上の原遺跡(縄文) | 14. 小倉谷遺跡 | 15. 茶臼塚古墳 | 16. 茶臼塚古墳群 |
| 17. 小倉谷横穴群 | 18. 大塚古墳 | 19. 上の原古墳群 | |

第1図 遺跡位置図(1/25,000)

Ⅱ 横穴群の調査

1. 遺構

鬼隈横穴群は、矢部川へ向って南から北へ下降する丘陵の東側斜面裾部近くに、硬質砂岩の山腹を掘り込んで築造されている。丘陵の頂部尾根筋には、横穴式石室を内部主体とする古墳が5基並び、裾部に2基所在する。さらに丘陵の東側斜面には14基からなる中通横穴群がある。鬼隈横穴群は標高49.0～61.0mの間に1段～2段の高さで17～18基程所在すると思われ、このうち、北側にあたる丘陵先端部から12基までを発掘調査した。当該横穴は大きく4群に分けられ、北より南へ1～4群とした。今回は1・2群の調査であるが2群最南部12号横穴は前面部の土砂崩壊が著しいため調査を断念し、1号横穴の北側で新たに発見されたものを13号として調査を行った。この13号横穴は、古い時期に土砂崩壊により入口がかなりの規模で埋まったのが幸いして盗掘からまぬがれており、閉塞したままの状態で見えられた。

1号横穴（第4図）

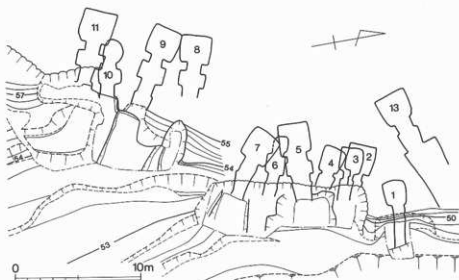
玄室の平面形は、玄門部よりも奥壁側の方が幅の広い羽子板形を呈し、規模は玄門部幅1.3m、奥壁部幅1.75m、天井までの高さ1.0mを測り、天井が低い。右側壁際の床面には溝状の掘り込みがあるが、排水溝を意識したものかどうかは不明である。玄室の立面形態はドーム形を呈し、縦断面もドーム形である。羨道部は幅0.8～0.86m、高さ0.75～1.0mで、入口に向かって高くなる。

2号横穴（第4図、図版2）

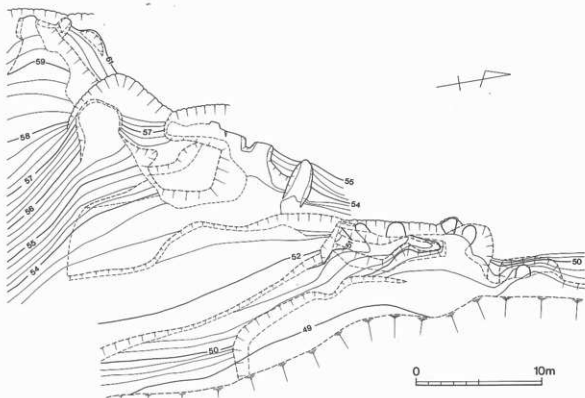
3号横穴の上位に構築されている。玄室の平面形は、中央部がやや張るものの方形状を呈し、規模は奥壁幅2.1m、中央幅2.3m、玄門部幅1.95m、天井までの高さ1.58mを測る。玄室中央部より奥壁までは10cm程の高まりをつけ、屍床を形成する。玄室の立面形態は、寄棟の家形妻入りであり、軒をもつ。羨道部は玄室の主軸より、若干南に振っている。

3号横穴（第5図、図版1）

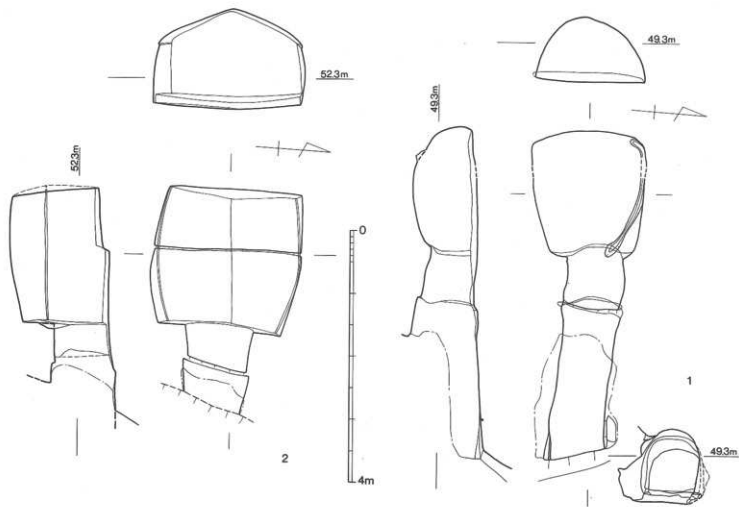
玄室の平面形は方形を呈し、規模は奥壁幅1.75m、玄門部幅1.7m、天井までの高さ1.1mである。天井部中央には主軸と平行にわずかに稜線が入るが、家形を意識したものではなく立面形態は切妻のドーム形に近いものである。奥壁は垂直に立ち、天井部の縦断面は水平である。玄門部直前の床面は幅20cm程の浅い溝があり、閉塞石を立てるために掘り込みを設けたものと思われる。羨道は幅0.9m、高さ1.2mのものが長さ2m程確認された。



第2図 鬼眼横穴群遺構配置図 (1/300)



第3図 鬼眼横穴群地形測量図 (1/300)



第4図 1・2号横穴実測図(1/60)

4号横穴（第5図、図版1）

玄室の平面形は羽子板形を呈し、規模は、奥壁幅1.91m、玄門部幅1.35m、天井までの高さ1.1mである。玄室の立面形態はドーム形を呈するが、左・右壁の傾きは異なっている。玄室中央部近くには屍床を意識して奥壁に平行にわずかに段がつく。羨道部は幅1.1～1.3m、高さ1.0mであり、長さ1.5m程確認された。羨道前面部には、幅0.4mで長方形を呈した掘り込みがある。

5号横穴（第6図、図版1）

玄室の平面形は隅丸方形を呈し、幅は2.3～2.6mであり、中央部がやや広い。長さ2.5m、天井までの高さ1.6mである。玄室の立面形態は寄棟で、家形の妻入りである。複室構造であり、前室の平面形は、長方形であり、幅2.1m、長さ1.05m、高さ1.6mを測る。前室の立面形態は、切妻で家形に近いドーム形を呈する。羨道部は長さ1.5mであり、前面には羨道より一段下がった位置に、幅3.5mの前庭部を設ける。

6号横穴（第7図、図版1）

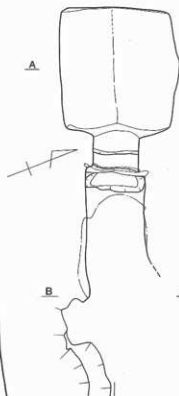
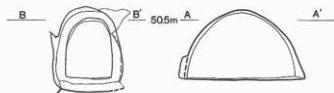
複室構造の横穴であるが、通常の玄室前面に前室がついたものでなく、玄室の後方に屍床のための一室を設けたものであり、玄室に比して規模は小さい。したがって、玄室後方の空間部は、当該地区の古墳石室内に石屋形等を設けたものと同じ意味合いを持つものと思われる。玄室の奥室は、平面形は隅丸長方形を呈し、立面形態はドーム形である。規模は長さ1.35m、中央部幅1.15m、高さ1.0mである。玄室の平面形は方形を呈し、幅1.35～1.48m、長さ1.6m、天井までの高さ1.35mを測る。玄室の立面形態は寄棟の家形妻入りである。階段状の前庭部は5号、7号横穴の前庭部構築により両端を削られた様な形態を呈する。羨門部の飾り縁は方形を呈するものである。

7号横穴（第8図）

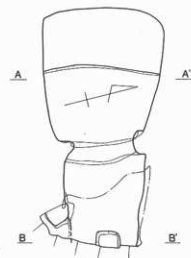
玄室の平面形は方形を呈しており、奥壁幅2.4m、玄門部幅2.0m、長さ2.4～2.53m、天井までの高さ1.53mである。立面形態は寄棟の家形、妻入りであり、天井頂部は主軸に平行に幅25cm程の平坦面があり、棟木を造り出したものと思われる。玄門部の床には溝状の掘り込みがあり、閉塞石を立てたものと思われる。羨道部の主軸は、玄室主軸より20度程ずれている。

8号横穴（第9図）

横穴入口部分は岩盤の崩壊により、厚く塊石が堆積しており、この部分から横穴内に入る事を放棄した。戦時中に防空壕に使用した際、南隣りの9号横穴玄室と通じる様に手加えられていたため、この通路を用いて調査した。複室構造であり、玄室は方形、前室は長方形の平面形

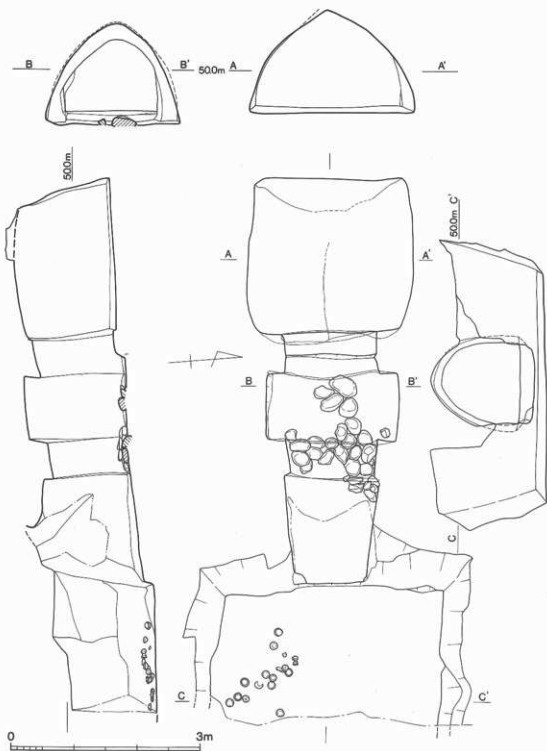


3



4

第5图 3·4号横穴夷测图(1/60)

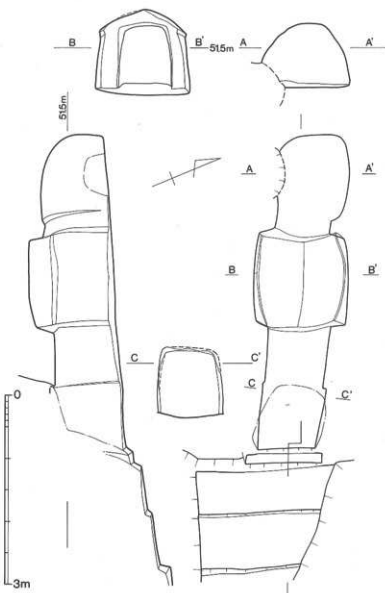


第 6 图 5 号横穴实测图 (1/60)

態である。玄室の規模は、幅2.1～2.4mで中央部がやや張る。長さは2.2～2.5mである。天井部は前室方向へ下降しており、奥壁高1.75m、玄門部高1.25mである。玄室の立面形態は切妻の家形妻入りである。右壁は二次加工により空洞を生ずる。前室は切妻の家形である。幅2.15m、長さ1.15～1.2m、高さ1.15～1.32mである。天井は羨道部へ向って下降する。

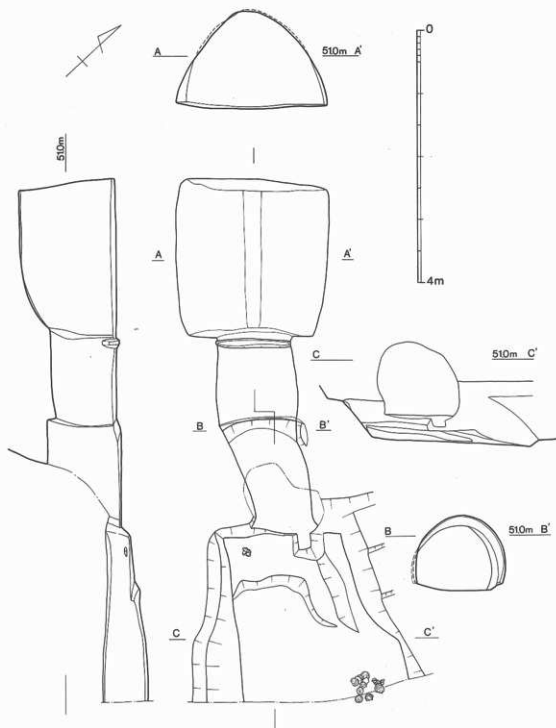
9号横穴（第10図、図版3）

複室構造であり、平面形態は玄室は方形、前室は横長の長方形である。



第7図 6号横穴実測図（1/60）

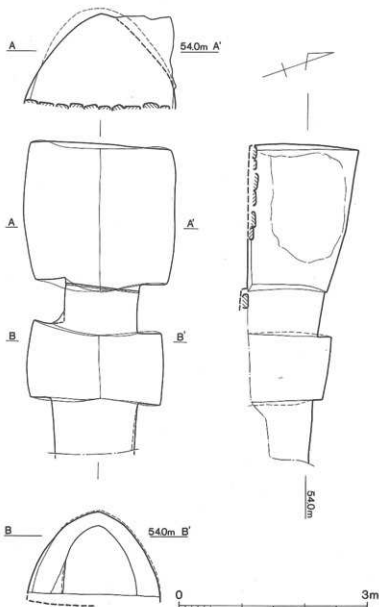
玄室の右側壁の一部は後世に二次加工され、8号横穴玄室と通じている。玄室の規模は幅2.25～2.55mで中央部が広い。長さ2.4m、天井までの高さは奥壁際が高く1.65m、前壁は1.45mである。立面形態は寄棟の家形妻入りである。壁面には工具痕が明瞭に残る。前室は河原石の敷石が残り、幅2.03～2.13m、長さ1.35m、高さ1.55mである。羨道部は長さ1.45m、幅1.42mを測り、ほぼ、完存している。全長7.15mである。



第 8 图 7号横穴墓测图 (1/60)

10号横穴（第11図、
図版3）

複室構造の横穴である。玄室の平面形は不整形であり、楕円形に近い。玄室中央部は、幅1.55m、長さ1.85m、天井までの高さ1.25mである。立面形態はドーム形である。前室の平面形は横長の長方形を呈し、幅1.7~1.9mで中央部が張る。高さは玄室とほぼ同じである。玄室と前室とを仕切る空間部の床はゴンドラ状に削り出され、中央部で10cm、左右壁際で20cmの高まりをもつ。玄室左壁の前半部は後世の掘削により、11号床面が一部見える。

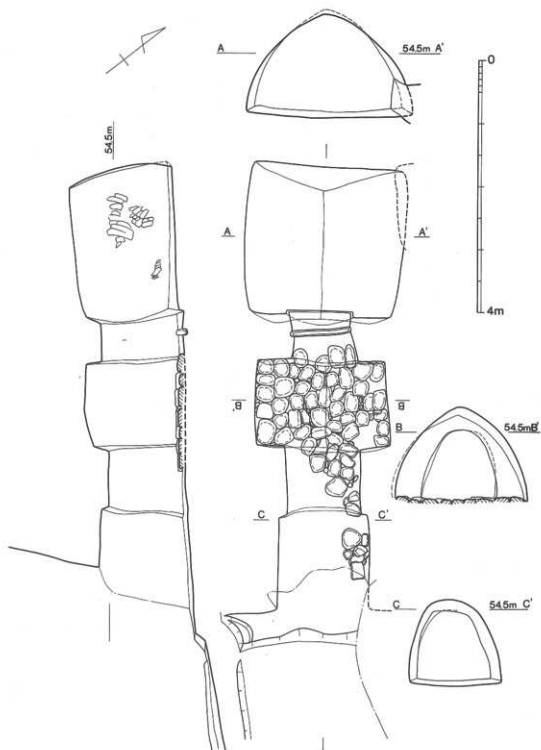


11号横穴（第12図、
図版4）

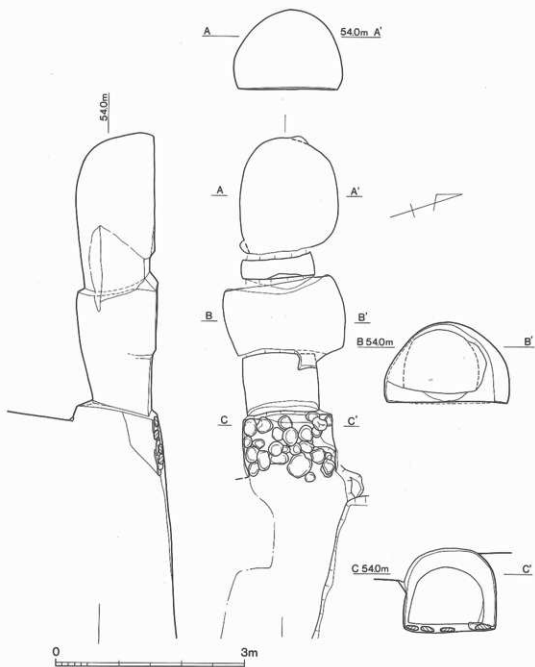
複室構造の横穴である。玄室の平面形は方形を呈し、規模は奥壁幅2.6m、前壁幅2.2

m、長さ2.5~2.65mである。天井は入口に向かって下降しており、奥壁高2.0m、前壁高1.48mである。立面形態は、寄棟の家形妻入りである。前室の平面形は横長の長方形であり、幅2.1m、長さ1.2~1.25mである。前室と羨道部との境の天井には段がつかない。

第9図 8号横穴実測図（1/60）



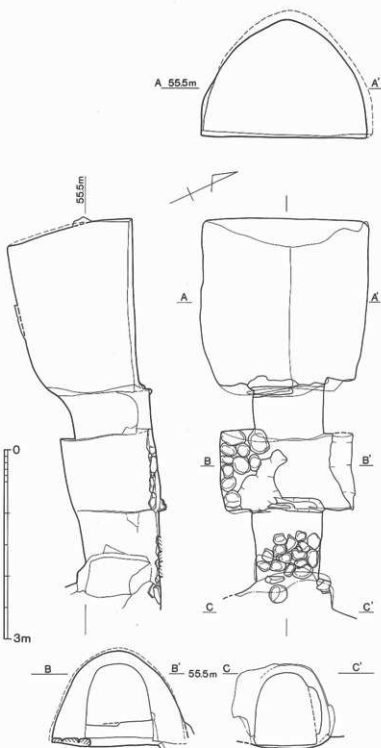
第10图 9号横穴実測図 (1/60)



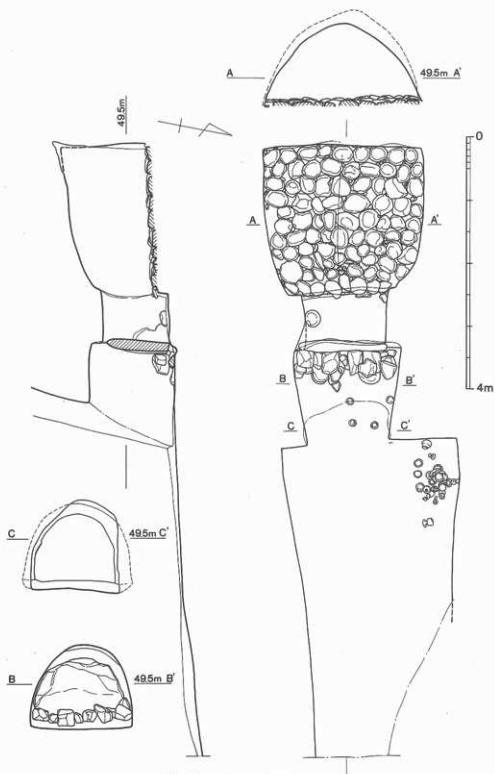
第11图 10号横穴实测图 (1/60)

13号横穴（第13
図、図版5、6）

当該横穴群の最も北側に位置しており、岩盤と土砂で入口は完全に埋まっていた。このため未盗掘であり、閉塞も完存していた。玄室の平面形は方形状を呈し、奥壁幅2.55m、前壁幅1.75m、長さ2.27~2.35mである。天井部は入口に向けて下降しており、奥壁高1.35m、前壁高1.05mである。立面形態は切妻の家形妻入りである。閉塞は厚さ15cm程で片岩の板石1枚を用いている。閉塞は玄門のドーム形をした飾り縁に見合う大きさの石を選んで垂直に立て、前面にはこれが倒壊しないように塊石を積んでいる。さらに閉塞石



第12図 11号横穴実測図 (1/60)



第13图 13号横穴穴测图 (1/60)

と飾り縁の接合部には土で密封したようである。前庭部は、床面から7m程上方の丘陵斜面から掘削され、上幅4m強、下幅2.8mの堂々たるものであった。床面の長さは5mまで確認できた。

2. 遺物

装身具

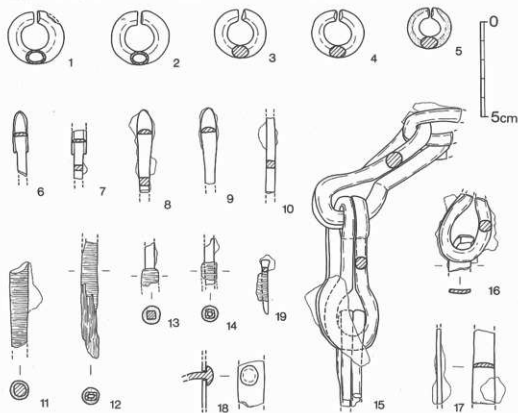
耳環 (第14図1～5、図版10)

いずれも13号横穴の玄室床面出土である。1、2は中空の金環でありセットである。1は若干破損しており、重さ5.5g、2は9.0gである。3、4は金環であり、セットである。3は19.2g、4は19.4gと重い。5は小型品の金環であり、腐蝕が著しい。重さ9.5gである。

鉄器

鉄鏃 (第14図6～14、図版10)

いずれも13号横穴の前庭部から出土した。6、7は片切刃造整箭式である。8、9は片丸造整箭式である。11～14は矢柄が遺存している。矢柄は木質上面に木の皮を薄く巻いている。



第14図 13号横穴出土装身具、鉄器類実測図(1/2)

馬具類 (第14図15・16、図版10)

15は兵庫鎖の片方であり、4連結のものである。16は兵庫鎖端部に鎖の頭部が連結している。17、18は木心鉄板張の鎖の一部である。鎖内面は凹湾されており、木製品の鎖下半部をとめる鉋が1個だけ見える。

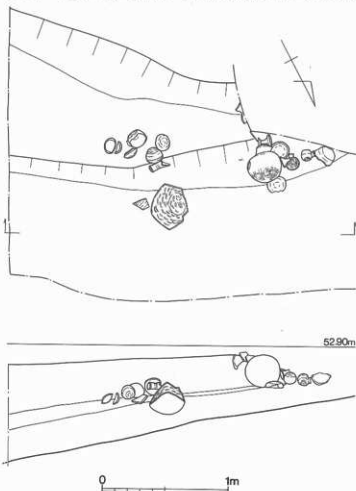
釘 (第14図19)

19は頭部の丸い釘である。釘と直行して木質が遺存している。全長2.9cmである。

土器

出土状態

12基の横穴中、玄室内から出土した土器は、13号横穴の提瓶(119)1点だけである。他の11基がすべて開口していた事を差し引いて考えても、玄室内からの土器の出土量が少なく、このことからもとと墓道、前庭への土器供献が主体であったと判断できる。5号横穴前庭部からは、須恵器、土師器合わせて59個体が出土した。土器は初葬時のもので前庭部床面に接地したのや追葬時の黒色堆積土中から出土したものがある。7号横穴前庭部からは、須恵器、土師器47個体が一括出土した。8号横穴は、前庭部左側壁際から37個体の土器が床面から浮遊した状態で検出された。9・10号横穴はともに前庭部からかなりばらばらの状態で出土しており、現位置を保たない。13号横穴出土土器は、墓道、前庭部右隅に供献されたものであり、特に前庭部右隅からは、鉄器とともに31個



第15図 8号横穴墓道土器出土状態実測図(1/30)

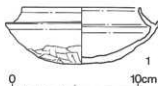
体が一括出土した。

1号横穴出土土器（第16図1）

杯身（1）

墓道からの出土品である。立上りは内傾し、口縁端部を直立させる。底部外面は静止ヘラ削りを施す。底部外面に第29図9のヘラ記号が入る。

出土した土器は、小田富士雄氏編年のIV期に属し、6世紀末頃に比定される。



第16図 1号横穴出土土器
実測図（1/3）

5号横穴出土土器（第17図、図版7）

前庭部から須恵器55個体、土師器4個体が出土した。須恵器は、杯蓋27個、杯身22個、埴蓋1個、身2個、高杯・甕・平瓶各1個体である。土師器は杯蓋3個、高杯1個であり、杯蓋は須恵器に似せて造られたいわゆる「赤焼き」土器である。

赤焼き土器

杯蓋（2・3）

ともに、天井部は回転ヘラ削り調整である。体部外面は横ナデの凹凸がつく。2は口径13.2cm、器高4.9cmである。3は口径12.1cm、器高4.9cmである。他の須恵器杯蓋に比して器高が高い等、細部において須恵器と異なっている。色調は明黄褐色を呈し、胎土には多量の砂粒を含んでいる。

須恵器

杯蓋（4～12）

I類（4～8）4～6は口縁端部内面に段がつくものであり、天井部外面は回転ヘラ削りを、施している。7・8は、内面口縁端部近くを凹湾させたものであり、端部は丸くつくられている。天井部外面は回転ヘラ削りである。

II類（9）内面の口縁部と体部の境に稜が入る。天井部外面は静止ヘラ削りである。

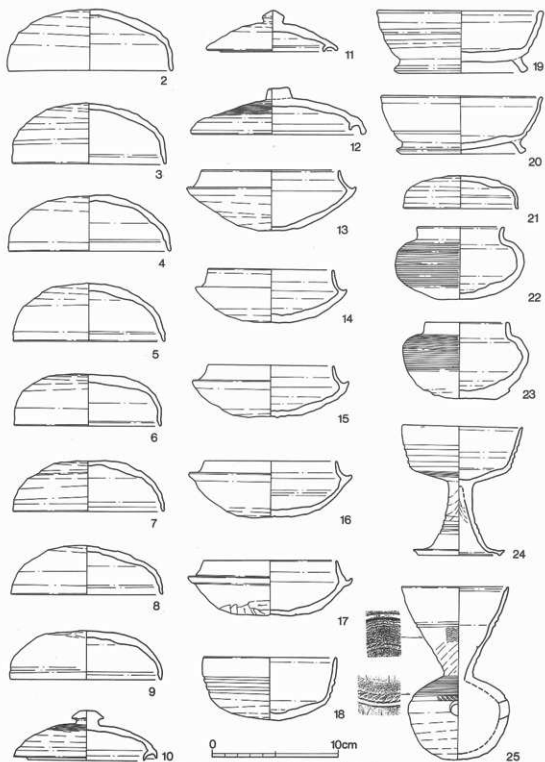
III類（10）頂部につまみが付き、身受けの返りをもったものであり、返りはやや長い。頂部周辺にカキ目を施す。

IV類（11）頂部に擬宝珠つまみが付き、丈の低い身受けの返りがつく。頂部周辺は回転ヘラ削りしている。III類に比し、小形で器高が低い。

V類（12）頂部に台形状のつまみが付き、短小の身受けの返りをもつ。口径は14cmと大形になる。つまみ周辺は目の細かいカキ目調整である。

杯身（13～20）

I類（13～15）立上りは1.3～1.5cmと長く、基部は内傾度が大きい。中程より直立させる。底部外面は回転ヘラ削りを施す。口径には大・小の2種類がみられる。



第17图 5号横穴出土土器实测图(1/3)

Ⅱ類 (16・17) 16は立上り高1.1cmとやや短くなり、底部外面は回転ヘラ削り調整である。17の立上りは1.4cmと長いが、底部外面は静止ヘラ削りであり、Ⅰ類よりは後出するものである。

Ⅲ類 (18) 杯蓋Ⅲ類とセット関係になるもので腕状の体部中ほどに3条の平行沈線が入る。底部外面は回転ヘラ削りである。

V類 (19・20) 杯蓋V類とセット関係になるもので、杯底部の端部に丈の長い高台を貼付する。

埴 (21~23) 21は蓋である。天井部外面は狭い範囲に回転ヘラ削りする。22はわずかに外反し、23は直立する口頸部である。体部外面はカキ目調整し、底部はいずれも未調整である。

高杯 (24) 小形高杯である。杯下半に4条の平行沈線を配し、脚柱中位に螺旋状に沈線を入れる。脚端部はわずかに外方へはね上がる特徴をもつ。

聴 (25) 口縁端部内面にわずかに段がつく。頸部中位に三角形の小突起を配し、直下に櫛描波状文を施す。底部は広範囲に回転ヘラ削りを施す。球状部には円孔を穿った際の土塊が入ったままである。

ヘラ記号は、蓋杯50個体のうち27個体に15種類みられる。

蓋杯Ⅰ、Ⅲ類はⅢB期に、Ⅱ、Ⅳ類はⅣ期に、V類はⅥA期に比定される。高杯はⅢB期、埴、聴はⅣ期に比定される。したがって土器より見た横穴の年代は6世紀後半に築造し、7世紀中葉までの追葬が行なわれたことを考えることができる。

7号横穴出土土器 (第18・19図、図版7・8)

前庭部から、総数47個体の土器が出土した。須恵器は杯蓋16個、杯身21個、平瓶1個、高杯2個、横瓮2個、甕2個であり、土師器は高杯3個体である。

須恵器

杯蓋 (26~30)

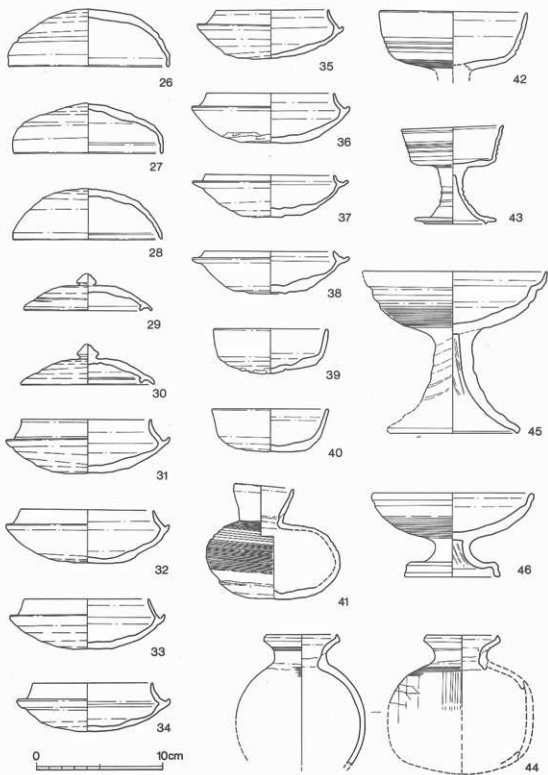
Ⅰ類 (26、27) 26は天井部と体部の境に沈線が入るもので古式の特徴を残しているが、端部内面は段がつかない。天井部外面は回転ヘラ削りである。27は口縁部内面に段がつくもので、天井部外面は回転ヘラ削りする。

Ⅱ類 (28) 口縁部と体部の境の内外面に稜がつく。天井部外面は回転ヘラ削りである。

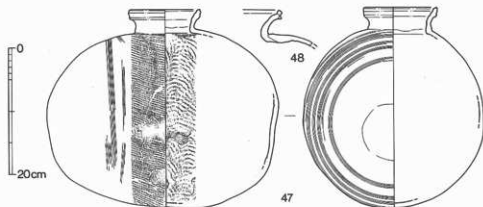
Ⅲ類 (29・30) 頂部に擬宝珠つまみがつき、短い身受けの返りをもつ。つまみ周辺部は回転ヘラ削りを施す。口径10.1~10.6cmの小形品である。

杯身 (31~40)

Ⅰ類 (31~36) 立上りは1.2~1.6cmと長く、口径は9~10.3cmと幅がみられる。立上りは基部は内傾し、中程から直立する。底部外面は回転ヘラ削りを施すが、36のみ静止ヘラ削りであ



第18图 7号横穴出土土器实测图(1/3)



第19図 7号横穴出土土器実測図(1/6)

り、一時期を画す必要があろう。

Ⅱ類(37・38) 立上りは0.5cmと短いものであり、口径に比して器高が低くなる。底部外面は未調整である。

Ⅲ類(39・40) 杯蓋Ⅲ類とセット関係になるものであり、杯部はわずかに外反気味に立つ。底部外面の調整法は、39は回転ヘラ削り、40は未調整である。

平瓶(41) 小形品である。肩部に3条の平行沈線が入り、胴部の広範囲にカキ目を施す。底部外面は回転ヘラ削りである。

高杯(42・43) 42は小形化していない高杯の杯部であり、体部下半に3条の沈線が入る。杯底部外面は、目の細かいカキ目調整している。43は小形の高杯であり、杯部の底部と体部の境は角張っている。杯部に5条の沈線が入り、脚柱部に3条の凹線が入る。

横盆(44・47) 44は口縁部を大きく外反させ、端部内面を直立させる。小形品であり、底部の一部を欠損する。47は大きな胴部に、短い口頸部を接合したもので、口唇部に浅い凹線が入る。胴部は部分的にカキ目がみられる。外面は平行叩き、内面は同心円叩きである。

甕(48) 口縁部は粘土を貼付して肥厚させており、内面は稜がつき、口唇部側面は凹線が入る。乾燥時に自重により若干押しつぶされた形態である。外面は平行叩き、内面は同心円叩き。

土師器

高杯(45・46) 大・小2個体である。45は口縁部内面を弯曲させ、鋭く稜がつく。杯部外面に2条の凹線を入れ、下半部にカキ目を施す。脚柱内外面にしぼり痕が著しい。46は口縁端部直下の内外面に凹線が入る。杯下半部はヘラ削り上をカキ目調整する。

ヘラ記号は、蓋杯37個体のうち22個体に10種類がみられる。

蓋杯Ⅰ類はⅢB期、Ⅱ、Ⅲ類はⅣ期に比定される。高杯42はⅢB期、43はⅣ期、小形の平瓶、

横瓮はⅢB期に属する。甕と大形の平瓶はⅢB～Ⅳ期に属する。横穴は6世紀後半に築造され、6世紀末頃まで追葬が行なわれている。

8号横穴出土土器(第20・21図、図版8・9)

墓道の左脇部分から土器37個体が出土した。須恵器は、杯蓋7個、杯身3個、高杯1個、甕1個、長頸壺1個、提瓶2個、甕5個であり、土師器は台付椀3個と、高杯の脚部4個体である。

須恵器

杯蓋 (49・50)

I類 (49・50) 49は口縁端部内面に段がつき、50は口縁部内外面に凹線が入る。天井部外面はいずれも回転ヘラ削り調整であり、50は天井部に平坦面を有する。

杯身 (51～54)

I類 (51～54) 立上りは1.5～1.6cmと長く、51以外は、立上り内面は中程より直立し、稜が入る。底部外面は回転ヘラ削りを施している。

高杯 (55) 小形の高杯であり、杯部は、底部と体部の境は角張る。脚柱部に2条の沈線が入る。脚端部は外方へ鋭く突出している。

甕 (56) 口頸部を欠損する。球状部上半部は目の細かいカキ目が入り、肩部に刺突文を配している。底部外面は回転ヘラ削りである。

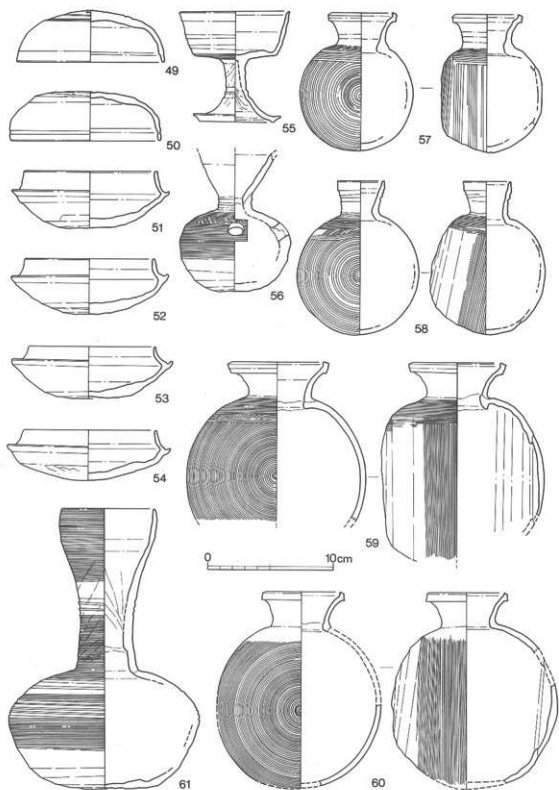
提瓶 (57～60) 57・58は小形品である。57は口縁端部内面を直立させ、口唇部に凹線を入れる。胴部背面は平坦である。58は頸部に沈線が入り、口縁端部は丸い。胴部は、背面もやや丸味を帯びる。59・60は中形品である。口縁部は、ともに57と同様のものである。59は胴部背面は平坦であるが、60は丸味をもっており球形を呈する。

長頸壺 (61) 頸部中ほどですばまった長頸は外反気味にのび、口縁部で若干内弯する。胴部は中位よりやや上位で屈曲して肩部となり、4条の沈線が入る。胴部下半は広範囲を回転ヘラ削りする。

甕 (62・63) 小形と中形の甕である。口縁部に粘土を貼付して肥厚させ、口縁部内面はわずかに段を有する。口唇部は凹線が入り装飾を添える。胴部上半部はカキ目調整している。外面は平行叩きであり、62は一部格子状叩きとなる。内面は同心円叩きである。

土師器

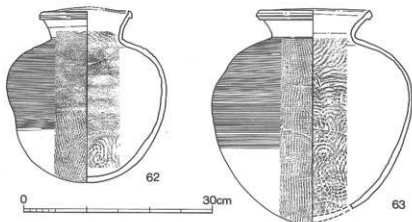
台付椀 (64～66) 64は深い杯部のほぼ全面に、断面V字状を呈したり11条の沈線を配している。杯部底面はヘラ削り上をカキ目調整する。脚部は、下面近くで屈曲し、稜をなす。65は杯底部はヘラ削り調整であり、脚部との接合面は螺旋状に沈線を入れ、接合し易くしている。杯部下半には5条のシャープな凹線を入れる。66の杯部は外反度が大きい。杯底部は回転ヘラ削りする。杯部に4条の沈線が入る。脚部は屈曲して開き、稜がつく。



第20图 8号横穴出土土器实测图(1/3)

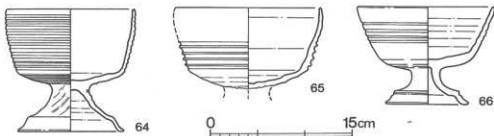
ヘラ記号は蓋
杯20個体中16個
体に、13種類の
ものがみられる。

蓋杯Ⅰ類はⅢ
B期に属する。
觥・提瓶はⅢB
期、高杯はⅣ期、
甕はⅢB期、長
頸壺はⅣ期に属
すると思われる。



第21図 8号横穴出土土器実測図(1/6)

土器器3個体のうち64、65は初葬時、66は追葬時のものと思われる。従って横穴は、6世紀後半に築造され、6世紀末頃まで追葬が認められる。



第22図 8号横穴出土土器実測図(1/4)

9号横穴出土土器(第23図、図版9)

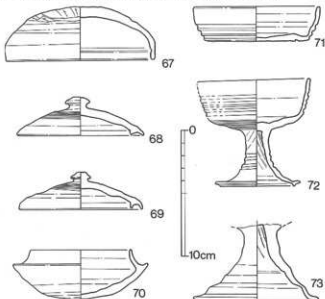
前庭部から15個体の須恵器が出土した。杯蓋4個、杯身8個、高杯3個体である。

須恵器

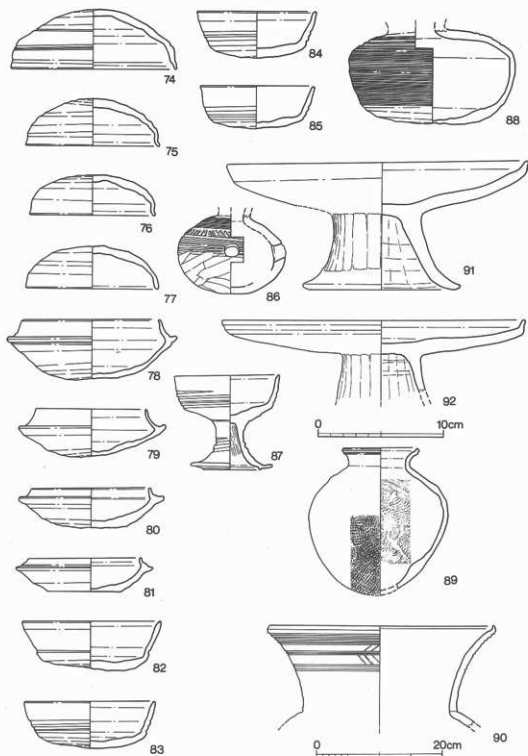
杯蓋(67~69)

Ⅱ類(67) 端部に近い口縁部
内面に凹線が入る。天井部外面
は静止ヘラ削りである。

Ⅲ類(68・69) 頂部に擬宝珠
つまみがつき、短い身受けのか
えりを有するものである。つま
み周辺部は目の細かいカキ目調
整する。



第23図 9号横穴出土土器実測図(1/3)



第24图 10号横穴出土土器実測図(1/3, 89・90は1/6)

杯身 (70・71)

I類 (70) 立上りは1.2cmであり、基部は内傾し、中ほどより直立する。口径8cm、器高3.9cmの小形品である。底部外面は回転ヘラ削り調整である。

III類 (71) 口径に比して器高の低い形態である。底部と体部の境は角張り、稜がつく。杯部下半に3条の平行沈線を配する。底部は回転ヘラ削り調整である。

高杯 (72・73) 72は小形品である。杯部に4条の沈線が入り、脚柱部に螺旋状の沈線を施す。脚端部を外上方へはね上げている。73は脚部のみであり、内外面とも凹凸が著しい。杯部との接合部は同心円叩きによる凹凸をつけ、接合を良くしている。

ヘラ記号は蓋杯12個体のうち10個体に見られ、6種類に分類される。

蓋杯 I類はⅢB期、Ⅱ、Ⅲ類はⅣ期に属する。したがって、横穴は6世紀後半に築造され、6世紀末までの追葬が見られる。

10号横穴出土土器 (第24図、図版9)

前庭部から土器が46個体出土した。須恵器は杯蓋16個、杯身25個、甕1個、高杯1個、平瓶1個、甕2個である。土器器は壺2個体である。これらの土器は前庭部の先端部に近い位置に散在していた。

須恵器

杯蓋 (74~77)

I類 (74) 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に段を有した古式の特徴を残すものである。器高は高く、丸味をもった天井部は回転ヘラ削りしている。

II類 (75・76) 口縁部を外反させる小形品である。天井部外面は回転ヘラ削り調整である。

III類 (77) 口縁部は丸くつくられ、天井部外面は未調整である。

杯身 (78~85)

I類 (78) 74の蓋はピッタリと合わないが、セット的である。底部外面は回転ヘラ削り調整である。蓋受け部に重ね焼きの痕跡がみられる。立上り高1.4cmである。

II類 (79) 蓋II類とセット関係になる小形品である。立上りは薄手造りであり、1.3cmを測る。底部外面は回転ヘラ削り調整である。

III類 (80・81) 立上りは短く、底部外面は未調整で平坦面を有する。

IV類 (82~85) 蓋受けをもたない杯である。体部下半に1条から4条の沈線が入る。底部は回転ヘラ削り調整である。

甕 (86) 口頸部を欠損する。底部は広範囲に静止ヘラ削りを施す。肩部に刺突文が入る。

高杯 (87) 小形高杯である。杯部の下面には螺旋状に沈線を配し、脚部にも螺旋状沈線が入

る。脚端部は外側への突出が大であるが、上方へのはねあげは小さい。

平瓶 (88) 口頸部を欠損する。底部は回転ヘラ削り調整であり、全面にカキ目が入る。

甕 (89・90) 89は小形の甕である。口唇部に凹線が入る。甕は長胴であり、底部はとがり気味の丸底である。焼きひずみが著しい。90は長頸の甕である。口縁部内面は直立し、口唇部は平坦面をなす。口縁部直下と、頸部上面2カ所に沈線を入れ、沈線間に羽状文状に刺突文を配する。

土師器

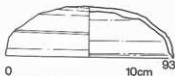
盤 (91・92) 口が広くて、浅い皿がのる。内面はヘラミガキしている。脚部は裾が広く、内外面にヘラ削りを施す。91は赤味を帯びた化粧土をかけている。

ヘラ記号は、蓋杯41個体のうち32個体に見られ、8種類に分類される。

蓋杯Ⅰ類はⅢA期、Ⅱ類はⅢB期、Ⅲ、Ⅳ類はⅣ期に属する。甕、高杯はⅣ期、平瓶はⅢB期、甕はⅣ期に属すると思われる。横穴は6世紀中葉に築造され、6世紀末まで数次の追葬が行なわれている。

11号横穴出土土器 (第25図)

前室の敷石部分から須恵器杯蓋が1個体だけ出土した。墓道、前庭部については未調査のための遺物の出土はない。



第25図 11号横穴出土土器
実測図(1/3)

須恵器

杯蓋 (93) 天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に段がつく古式の特徴を残している。天井部外面は回転ヘラ削り調整である。口径13.4cm、器高4.0cmである。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒をほとんど含まず良好である。天井部外面に×印のヘラ記号を有する。

出土した土器はⅢA期に属し、6世紀中葉に比定される。

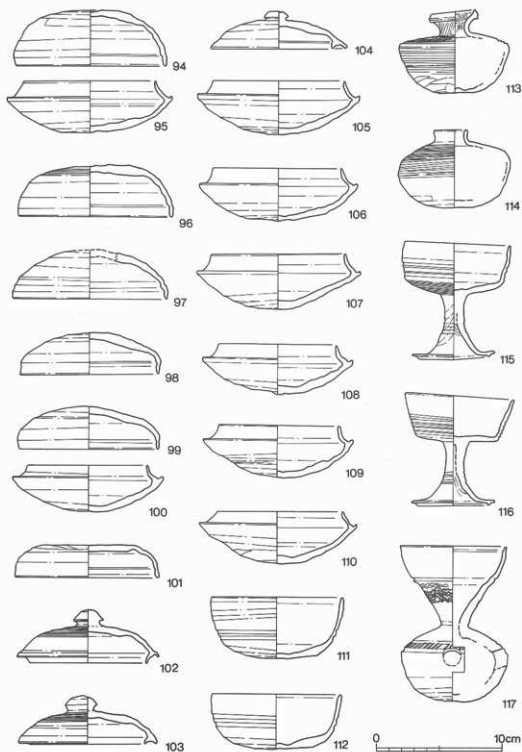
13号横穴出土土器 (第26～28図、図版9・10)

当該横穴は未盗掘のため、玄室内から提瓶1個、前庭部、墓道から48個体の土器が出土し、特に前庭部出土土器は供献状態のわかる好資料であった。須恵器は杯蓋20個、身19個、埴2個、高杯2個、甕1個、提瓶2個、壺1個、甕1個であり、土師器は高杯2個である。

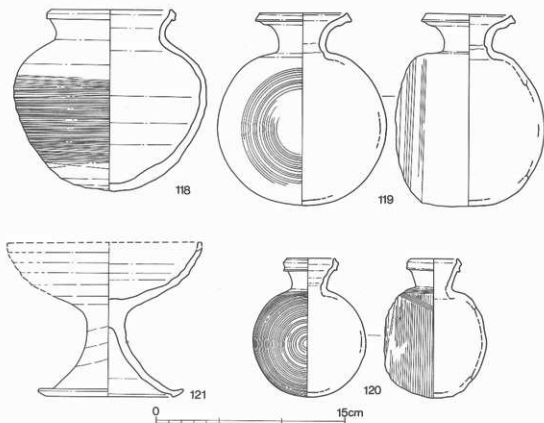
須恵器

杯蓋 (94・96～99、101～104)

Ⅰ類 (94・96・97) 口縁端部内面に段を有するものである。94・96は口径、器高が大である。天井部外面は回転ヘラ削り調整である。



第26图 13号横穴出土土器実測図(1/3)



第27図 13号横穴出土土器実測図(1/3)

Ⅱ類 (98・99) 口縁部内面に凹線が入るもので、天井部外面は回転ヘラ削りしている。口径に比して器高が低くなる。

Ⅲ類 (101) 天井部は静止ヘラ削りであり、平坦面を有する。

Ⅳ類 (102・103) 身受けの返りをもつもので頂部に擬宝珠つまみがつく。つまみ周辺はヘラ削り後、カキ目調整する。

V類 (104) 短い身受けの返りをもつものであり、口径、器高が小となる。

杯身 (95・100・105～112)

I類 (95・105～108) 立上りは1.3～1.5cmと長く、内傾するが、中ほどより直立する。底部外面は回転ヘラ削り調整である。108はI類の中では小形品である。

Ⅱ類 (100・109) I類に比して口径が小さくなり、立上りも1.2～1.3cmと低くなる。底部外面は回転ヘラ削りである。

Ⅲ類 (110) 立上りは短く、底部外面は静止ヘラ削り調整である。

Ⅳ類 (111・112) 蓋受けの返りをもたない杯であり、杯部は深い。杯部下半に2条の沈線を

配している。底部外面は回転ヘラ削りである。蓋Ⅳ類とセット関係になるものである。

埴 (113・114) 113は口縁端部に粘土を貼付して肥厚させ、口唇部下面に沈線を入れる。肩部の境はやや角張っており、3条の沈線が入る。底部は回転ヘラ削りである。114は短く直立する口頸部を有しており、底部は回転ヘラ削りする。

高杯 (115・116) 115の杯部底面は丸味をもち、116は角張る。脚端部を外側上方へはね上げる特徴をもつ。杯部下半と、脚柱部に平行沈線を入れる。

甕 (117) 口縁端部内面はわずかに段がつき、頸部中ほどに沈線を入れる。沈線直下には波状文が入る。球状部中位に沈線を入れ、直上部に刺突文を配す。底部は回転ヘラ削りである。

壺 (118) 口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。底部は広範囲に回転ヘラ削りを施す。

提瓶 (119・120) 119の口唇部は平坦である。胴部の背面はやや丸味をもち、ヘラ削り調整している。120は小形品であり、全面にカキ目が入る。

甕 (122) 前底部出土品である。口唇部上面は平坦であり、側面と下面は凹線が入る。胴部上半分はカキ目調整ののち部分的にナデている。外面は平行叩き、内面は同心円叩きが入る。器表には他の土器片が若干付着する。全面に自然釉がかかる。口径13cm、器高27.1cm。

土師器

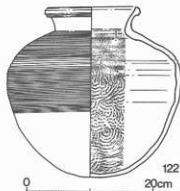
高杯 (121) 杯部内外面は横ナデの凹凸が著しい。脚端部は外側上方へはね上げている。杯部の底面は回転ヘラ削り調整している。

ヘラ記号は蓋杯40個体のうち、32個体に見られ、12種類に分類される。

蓋杯Ⅰ・Ⅳ類はⅢB期、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ類はⅣ期に属する。高杯115はⅢB期、埴、甕、高杯116、提瓶はⅣ期に属する。壺、甕はⅢB期に属すると思われる。横穴は6世紀後半に築造され、6世紀末まで追葬が行なわれている。

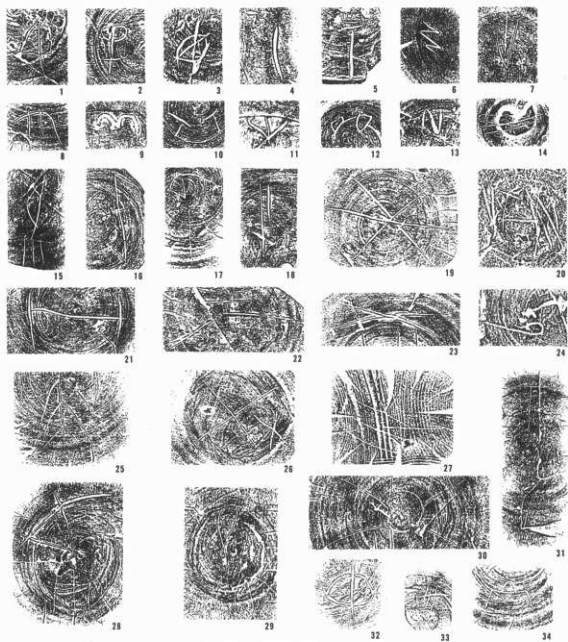
ヘラ記号

個体数が確認しえた須恵器242個体中、149個体にヘラ記号が入っている。ヘラ記号の種類は37種類以上(第29図参照)に分類され、いづれも土器調整の後、生乾きの時にヘラ状器具の先端部で記されている。中には、若干であるがかなり乾燥が進んだ時期に表面をなでつけた状態のヘラ記号があった。ヘラ記号の種類、数量ともに最も多い蓋杯は、天井部及び底部外面にヘ



第28図 13号横穴出土土器
実測図(1/6)

ラ記号を入れており、内面に入ったものはない。他の器種も大半は外面に入れるが、高杯のみは脚柱内面のもの、外面に記すものの2カ所が見られる。



第29図 へら記号拓影(約2/3)

Ⅲ おわりに

1. 横穴の構造について

①玄室の平面形態は、方形、羽子板形、不整形の3種類が見られ、中でも方形プランのものが多数をしめる。方形プランを細部に見ると両側壁が中央部で張った胴張り形態を呈するものが半数程見られ、このことは筑後地区特有の石室形態を横穴に準拠したものと受け取れる。

②12基の横穴のうち、6基が複室構造である。このうち6号横穴は、玄室後方に石室形に匹敵する墓室を設けている。6号横穴を除く5基は、前室の平面形がいずれも横長の長方形を呈するものである。

③玄室天井部の立面形態は棟を表現した家形のもの、天井が半球形を呈するドーム形の2種類がみられる。

棟を表現した家形は、屋根の形により寄棟と切妻に細分され、前者は2、5～7、9、11号横穴があてられる。後者は8、13号横穴の2基である。家形のものにはさらに軒を表現した2、6号横穴、棟木を表現した7号横穴がある。いずれの横穴も妻入りである。

ドーム形の立面形態を呈するものは縦断面では奥壁が垂直なものと、曲線を描くものとに2分される。

④玄室天井部の縦断面形態は、家形のものはずべて、奥壁部分が最も高く、玄門部へ向って直線的に下降する。ドーム形のものには3号横穴の如く水平なものと縦断面もドーム形を呈して中央部が最も高いものがあり、後者の比率が大である。

⑤床面は、1号横穴に一部排水溝らしきものが見られるが、他の横穴には全く排水施設は施されておらず、当該横穴群は排水施設を施さないのが一般的な形態といえる。

床面のレベルは、玄室のみ一段高く削り出したもの4基（複室3基、単室1基）、玄室の奥半分だけ1段高くしたもの2基があるが、他の6基はほぼ平坦で、床面はわずかに入口方向へ下降する。この、平坦なものの6基のうち、玄門部に仕切石状に高まりを造ったもの4基がある。したがって12基中10基については玄室は墓室を意識して何らかの方法で区画されている。

⑥閉塞は13号横穴で、板石1枚を用いて行っているのが検出されたが他は不明である。閉塞の場所は、玄門部入口に溝状の掘り込みを設けて、飾り縁に立てかけて行っている。

⑦玄室空間部は、奥半分を一段高く削り出して屍床としたもの若干と、床面に特に施設をものないものが大半であり、肥後型に特有の玄室中央部に通路を設けて、コ字型に屍床を配置するものはみられない。

2. ヘラ記号について

鬼隈横穴群のうち、12基の調査により総数258個体の土器が出土した。須恵器242個体のうち、

その2/3に近い149個体から37種類以上のヘラ記号が検出された。このうち蓋杯は201個体中139個体にヘラ記号が認められる。

ヘラ記号は、土器製作の工人一人一人が、自己の必要性により独自の記号を土器に刻したと考えられるものであり、特に似通った形態の蓋杯に圧倒的に多数みられることは、窯出しの際の混同を去けることも一要因と考えられる。したがって、産地である窯跡出土のヘラ記号と、消費地である横穴出土のヘラ記号を比較検討することは、生産、流通という当時の社会構造の一端の解明に役立つと思われる。現在まで、八女郡内における須恵器窯跡は八女丘陵で発見されており、このうち、塚ノ谷4号窯跡は当該横穴築造時期と近く、距離的にも至近の距離にある。塚ノ谷4号窯跡からは30種類以上にのぼるヘラ記号が見られ、このうち、当該横穴出土器と同一記号のものは第29図の3、6、9、13、18、19、23、34の8種類である。同一記号のうち、かなり特徴的な記号については、同一工人の手になった確率は大であり、ヘラ記号の類似点だけでなく、小形高杯等の土器形態の特徴からも、鬼隈横穴出土土器は、塚ノ谷窯跡からの招来品と考えられるものがかかなり見られる。このことはまた逆には、塚ノ谷窯跡に見出しえなかったヘラ記号の土器は、現在までに発見されされている窯以外に、多数の窯跡が存在していることを示唆するものである。

3. 遺体埋葬について

人骨は、13号横穴の玄室から小片が出土したのみであり、1横穴に何体埋葬したかは不明である。各横穴から出土した土器を見ると最低1時期、中には5号横穴の様に年代に約半世紀余りのひらきがあり、数次にわたる追葬が考えられる。

13号横穴では玄室床面の北壁寄りから耳環が出土しており、遺体の安置状態がわかる。第13図の耳環3、4は最終埋葬時の遺体着装品と思われ原位置を保っている。これによると頭部を北壁に向けて、奥壁に平行に南北方向に遺体を安置している。耳環1、2はセットであるが追葬時の清掃の際に1のみ、壁際に移動している。

耳環は3種類あるため、最低3体以上の埋葬を考えることができる。

4. 築造年代について

当該横穴群中、最も古い時期の土器を出土したのは10・11号横穴であり、6世紀中葉である。他の10基は、6世紀後半に築造され、6世紀末頃までの追葬が行なわれている。このうち最も遅くまで追葬が見られるのは5号横穴の7世紀中葉である。平面形態と年代との関連では、6世紀中葉の築造開始期には複室構造をとり、その後は、単室、複室の両方が同時に行なわれている。

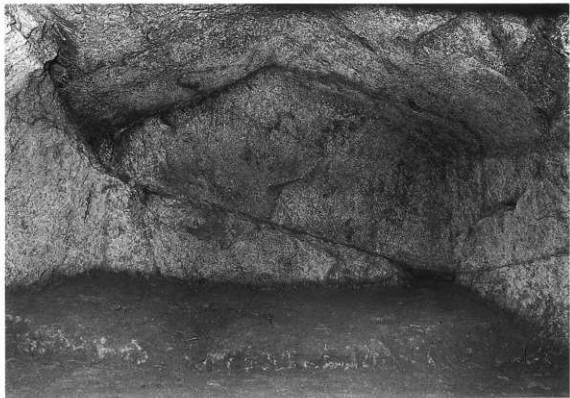
版 圖



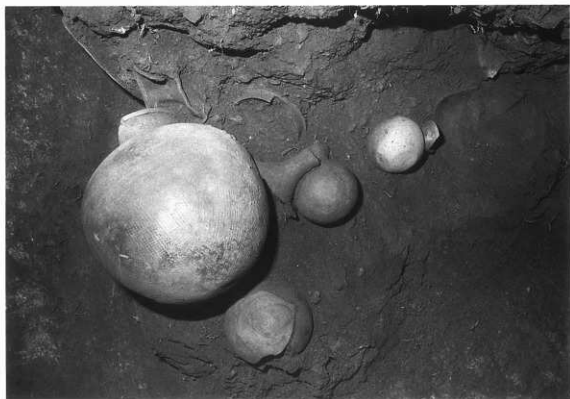
鬼隈 1～7、13号横穴遠景



2～6号横穴（右上2号、右から3・4・5・6号）



2号横穴 玄室



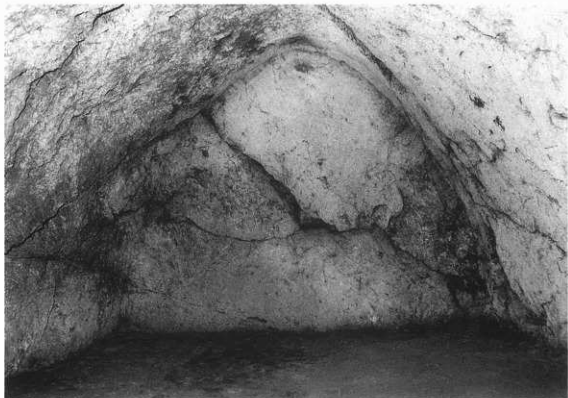
8号横穴 墓室土器出土状态



9号（右）、10号（左）横穴



9号横穴 前室から入口を望む



11号横穴 玄室奥壁



11号横穴 前室から玄室を見る

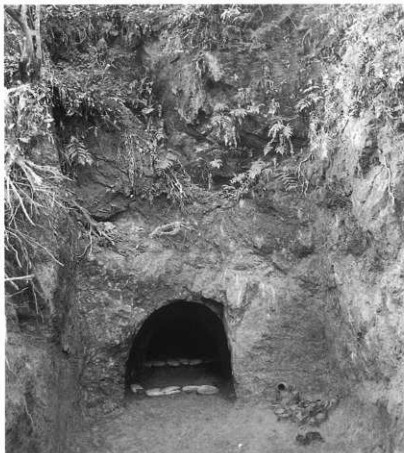


13号横穴 閉塞状態

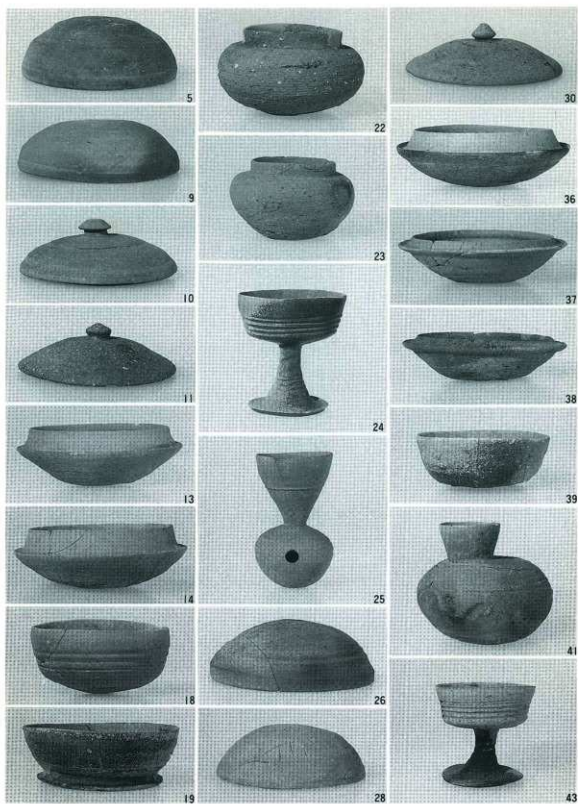


13号横穴 閉塞除去後

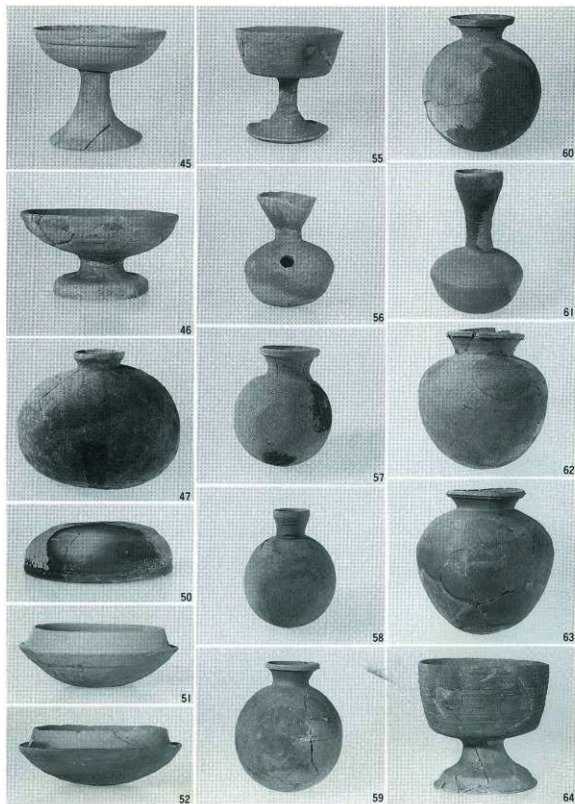
13号横穴 前庭部

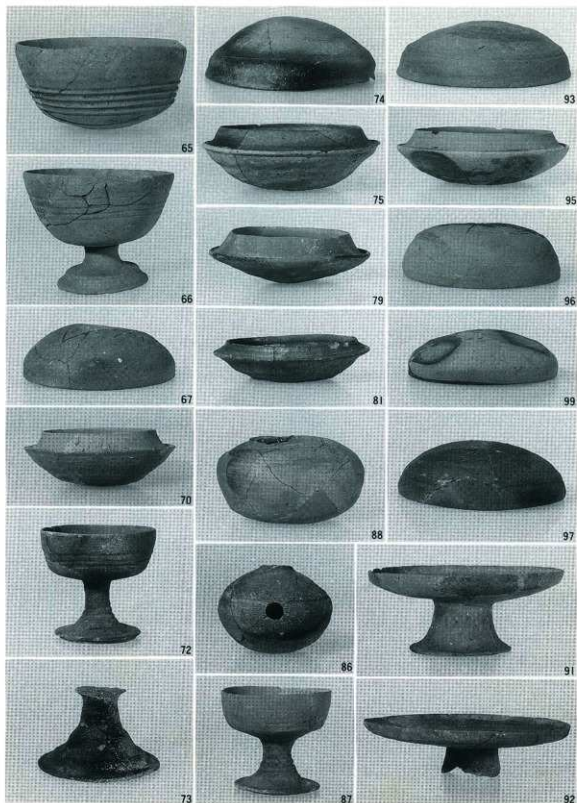


13号横穴 前庭部右隅土器出土状態

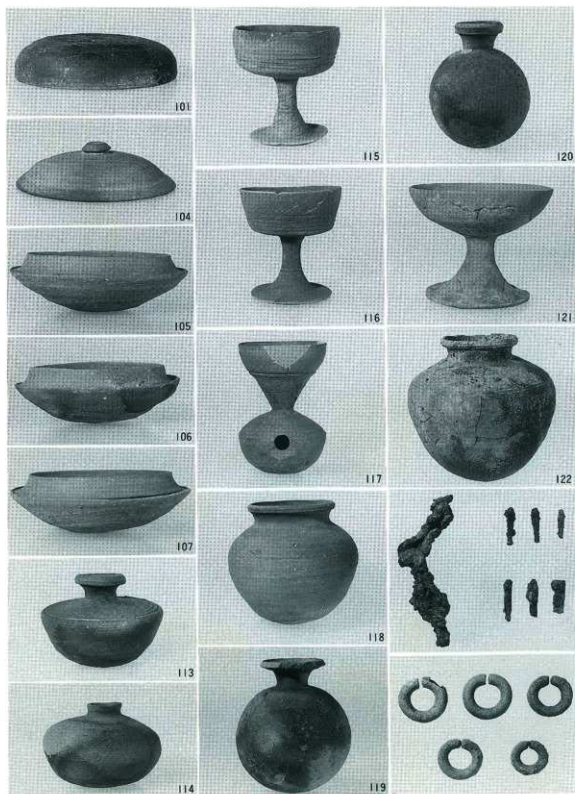


5号・7号横穴出土土器





8号·9号·10号·13号横穴出土土器



13号横穴出土土器・耳環・鉄器

鬼 隈 横 穴 群

立花町文化財調査報告書

第 3 集

昭和62年 3 月31日

発行 立花町教育委員会
八女郡立花町大字谷川1130

印刷 日本商工株式会社 印刷部
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の31